

松本市教育研修センターだより

No.38 令和7年5月30日

教職員の学びをつなぎ、学校力 UP!!

松本市主催の教職員研修は、今年で3年目を迎えました。研修センターでは、「点を線に、線を面にする」という思いから、共通の言語で語り合える仲間づくりを大切にしています。昨年度は、ICT 研修を各学校の研究主任、ICT 担当の先生方に受講いただきました。今年度は、校長マネジメント研修、教頭マネジメント研修、教務主任研修を同日に設定し、信州大学の佐藤先生にご講演いただきました。松本市の DX 推進を、学校の核となる先生方が共に学ぶことで、チームとしての学校力向上を期待し、研修を企画しています。

また、昨年度に引き続き実施する継続研修では、より深い理解と知識を習得し、日々の授業づくりや校内研修に活かせるよう工夫しています。「探究的な学びを支える教師とは？」と、長野短期大学学長の畔上先生からは多くの実践例を通して探究的な学びの本質をご提示いただきました。さらに、研究主任研修では、小金井市立南小学校教諭の村上聡恵先生をお招きし、校内研修のワークショップを実施しました。他にも、松本の歴史を学ぶ松本城研修や、国語や算数の授業づくりセミナーなど、多くの研修が行われました。

対話と協働で創る職場と授業

研究主任研修（5月2日実施）

今年度も、村上聡恵先生を講師にお招きしました。本研修では、「研究」を堅苦しいものと捉えるのではなく、職員が前向きに楽しく取り組める「職場づくり」としての研究のあり方がテーマとなりました。特に、職員間の対話を促進し、新たな気づきやアイデアを生み出す有効な手段として紹介された「ラウンドスタディ」の手法は、参加された先生方も楽しみながら体験していました。村上先生は、「研究の意味とは？」という問いに対し、「新しいこと、まだやったことのないこと、その人たちがしかできない何かを、みんなで創れる楽しさ、面白さがある」と語られました。研究主任の先生方はこれまでの取組みやこの研修での経験から、村上先生の言葉の実感を得ていたようでした。



【参加者の声】

- ・研究というと、どちらかといえば避けられがちかなぁと感じていますが、いいことはもちろん、ちょっといいづらいようなことにも蓋をせず、みんなが話しやすい環境になるよう、先生方が負担と感ぜないような研究になるよう考えていきたいです。
- ・研究主任の仕事というのは、先生方の「こうやってみたい」「やってみたらこうだった」「次こうしてみよう」を引き出すことなんだと、今日感じることができました。そう思ったら、一気にこの立場は面白いと思えるし、肩の荷が下りる気がしました。

畔上先生と学ぶ探究的な学び（5月8日実施）

長野短期大学学長の畔上一康先生をお招きし、AI時代における教育の課題を踏まえ、子どもたちが自ら問いを持ち、考え、行動する「主体的主体」を育成する「探究の学び」の重要性について深く考える時間となりました。畔上先生は、教師の「観」（教育観・子ども観）こそが、生徒が目を輝かせ探究活動に取り組む「生き生きとした学び」を生み出す鍵であると強調され、教師が子ども一人ひとりの内なる声に耳を傾け、共に考える「関わり方」の重要性を、事例を示しながら話してくださいました。また、教師主導の「ツリー型」ではなく、生徒の思いや発見を繋ぎ合わせながら構想する「リゾーム型」の授業づくりが紹介され、教材は知識として貼り付けるための存在ではなく、生徒の内なる可能性を「掘り出す」ための「道具」であるという教材観の転換が促されました。さらに、すぐに答えが出ない問いに対しても探究し続ける力、「ネガティブケイパビリティ」の意義にも触れ、それを育む子どもたちが安心して自分を表現できる「承認される場」の重要性を学びました。

【参加者の声】

- ・授業構想の際に授業のスケッチメモについて伺いました。一人ひとりの子どもの考えを取りこぼさないためのスケッチをぜひやっていこうと思います。
- ・「誤りにも必ず論理がある」「共感的対話者として、生徒の誤りに意味付けをする」「Revoice 以前に、活動中の子どもを見る際に、発言や行動の背景にある意味世界を理解し、その子から見た正解を理解しようとする」という3点を、今後大切にしていきたいと感じました。

共通言語、同じ視点から学校改革を考える：校務DX推進の新たな一歩

5月16日に実施された校長、教頭、教務主任の研修では、対面とオンラインで信州大学の佐藤和紀先生による「校務から始める学校のDX推進」の講義を受講しました。この研修は、学校運営を牽引するリーダー層が、これからの学校に不可欠なDXの概念と具体的な実践について深く理解を共有する貴重な機会となりました。佐藤先生からは、日々の業務効率化に繋がる具体的なクラウドツールの活用法が紹介され、「集まらない、印鑑を押さない、印刷しない」という働き方改革の原則が伝えられました。従来の業務習慣を見直す強いインパクトを受け、校長先生方はトップとしてDX推進のビジョンの明確化、教頭先生方は職員間、子どもたち、保護者、地域との「つながり」を強化する視点、教務主任の先生方は月暦や週暦、施設予約などのデジタル化を通じて、それぞれが校務DXを推進していく必要があることを感じていたようです。ICT活用に苦手意識を持つ先生が多い中でも、セキュリティや職員間の意識統一といった課題や、今後の推進に向けた具体的な方策を考える機会となりました。

【参加者の声】

- ・できることから始めていくことの重要性が確認できた。
- ・職員室の黒板がわりにモニターを使う、チャット機能の利用、スプレッドシートを利用した共同編集など、いくつかアイディアが出ました。研修後に、モニターがつながるか確認したり、チャット機能を使ってみたりしました。先生方の理解を得ながら、本校で実践できそうなことを探り、実施していきたいです。



このように、校長、教頭、教務主任の先生方が、佐藤先生から校務DX推進について一緒に学ぶことで、各学校のリーダー層が共通の認識と目標を持つことができました。昨年度からの研究主任・ICT担当者への研修と合わせ、学校全体としてDX推進に向けた「共通言語」と「同じ視点」が醸成されつつあります。これにより、各学校では、組織的な連携のもと、月暦や週暦のデジタル化、施設予約のクラウド化、チャット機能の活用など、具体的な校務効率化の取り組みが「できることから」推進されていきそうです。先生方の働き方改革を推進し、子どもたちと向き合う時間を

創出するための、松本市全体での学校改革が加速していきそうです。